

優秀賞（あいテレビ賞）

「私のランドセル」

西条市立西条西中学校　2年　井上詩子

私には双子の妹がいます。二人が生まれる時、無事に生まれるよう家族みんなが心配しました。あれからもう六年。小さく生まれた妹たちは元気に成長し、来年いよいよ小学一年生になります。色とりどりのランドセルが店先に並び始め、「ラン活」の始まりです。

もう何年も前の話になりますが、小学校入学前、私は薄い紫色か、水色のランドセルが欲しくて、入学するときに買うのを楽しみにしていました。私は新しい制服を着て、自分の好きな色のランドセルを背負った自分の姿を想像して、わくわくしていました。ところが父にこう言われたのです。「女の子だから赤を選びなさい。昔は男の子は黒、女の子は赤と決まっていた。それに、変わった色やデザインだとそのうち飽きてしまう。」結局、私は我慢して、赤いランドセルを買いました。小学校生活を送りました。

当時はその赤いランドセルを、気に入ろうとしていたのを覚えています。しかし、入学式当日、周りの子たちが、自分の好きな色にしてもらった、と話しているのを聞いたり、私が欲しかった色のランドセルを持っているのを見たりすると、涙が出てきました。今思えば、自分の思いに反することは、それほど悔しく、辛いことだったのです。低学年の頃は、父の言うことだからと、本当の自分の気持ちは抑えて、諦めていました。しかし、高学年になるにつれ、当時を思い出すと疑問を感じ始めました。

赤色やピンク色、リボンが付いている、イコール女の子っぽい、かわいらしい。黒色や青色、かっこいいもの、イコール男の子っぽい。昔は黒色と赤色しか無かったというから、仕方がないのかもしれません、ランドセルは、男の子は黒色、女の子は赤色、という考えは、父の固定観念ではないだろうか。私の頭には、このような考えが浮かびました。

確かに私も、何の疑問も無く、公衆トイレなどで、赤色と黒色のマークが付いて分かれていれば、迷わず赤色の方へ行きます。自分の持ち物を見ても、赤色やピンク色、リボンが

付いたもの、キラキラしたもの、身の回りのほとんどの物が、かわいらしい明るい色の物でいっぱい、何の違和感も感じていませんでした。制服も、今の時代はスカートかズボンを選べる学校が増えてきていますが、まだまだ、男の子はズボンで女の子はスカート、という感覚は私たちの意識の中に根強くあると思います。私は自分のランドセルの色について考えたことがきっかけで、色や形で区別することに対して、なぜなんだろうと考える意識が芽生えました。

全ての女の子が、赤色やピンク色が好きで、全ての男の子が黒色や青色が好きだということは、絶対にあり得ません。性別に関係なく、人それぞれ、いろいろな考え方や好みがあり、それが個性だと思うのです。

きっと父は、私のためを思い、考えて言ってくれたことだと思います。でも、「男の子は黒、女の子は赤」という考えは、もう古いと思います。実際に、ランドセルの色は、現在、数十種類に及びます。デザインも豊富にあります。見た目も、男の子でも女の子でも使えるデザインの物がたくさんあります。私は昔からある物を、何もかも否定しようというわけ

ではありません。固定観念や思い込みは捨てて、性別などではなく、それぞれの考え方や個性を大切にするのが、本来、当たり前のことなのではないでしょうか。

私たちは、物事を見るとき無意識のうちに、ある考えに捉われることがあります。それは、「固定観念」や「思い込み」、つまり「偏見」です。今自分の考えが、偏っていないか、誰かを悪気なく傷つけていないか、勝手な解釈で誤解していないか、一度立ち止まって、良く考える必要があると思います。そして、その考えが本当に正しいことなのか、しっかりと本質を見極めることが大切です。

今、妹たちは店先のカラフルなランドセルに目を輝かせています。私のような思いをせず、自分の好きな色、好きな物を自由に選び、小学生になる日を楽しみに待ってもらいたいです。もし、妹たちが選んだ物を反対されていた時には、私が味方になってあげようと決めています。

私はこれから先、自分で何かおかしい、と感じた時には、その違和感をそのままにしない生き方をしたいです。出会った言葉や行動の意味を良く考え、まっすぐに、公平に物事を

○無断転載禁止○　※本作品を広報誌等に掲載したい場合は、下記に御連絡ください。

松山地方法務局人権擁護課　TEL（089）932-0888（代表）

見ることのできる目をもっと養いたいです。自分はこの世に一人しかいません。全く同じ考え方の人もいません。だからこそ、誰もが大切で、お互いに尊重し合うべき存在なのだと思います。私は自分の好きな色のランドセルが選べる人、人が何色のランドセルを選んでも、認めることのできる大人になります。